



国立大学法人
信州大学

信大 NOW

SHINDAI NOW

SHINDAI NOW is the communication bridge between YOU and the University.

No. **60**

新聞を読もう! 第1回

新聞は「私」を変える。

特集① 新体制発足。新学長、
「知の森」を語る。

◎学士山岳会・山岳会 信州大学創立60周年記念事業

特集② 信州大学登山隊、
ヒマラヤに行く!



特集2

信州大学登山隊、ヒマラヤに行く①

信州大学創立60周年記念事業 信州大学学士山岳会・山岳会

この秋、信州大学山岳会とOBで組織する学士山岳会が、ヒマラヤの山々にトライした。信州大学創立60周年を記念して、なんと60余名参加による、4チームの登山隊・トレッキング隊を結成し、多彩な挑戦と試みを実施。11月初旬現在、第二、第三、第四チームは帰国し、第一チームは難所のネムジュン(7139m)北西壁の初登攀を成功させ、カトマンズへ向かっている。今号と次号にわたり登山隊の山行について特集する。

山のスゴイ魅力を伝えたい!

かつて信大は登山好きの学生たちが集まるところとして知られていた。ここ10年ほどは、全国的に大学の山岳系の部活、サークルの数は激減、衰退している。なぜ山に登らなくなってしまったのだろうか?大自然の懐に飛び込んで、山頂を目指し、自らの心と体力に挑む登山。日常生活で味わうことのない自然の厳しさや、たとえようのない美しさに出会うこともある。そして全力を出した達成感からは、ゆるぎない自信が生まれ、仲間との信頼関係も強まる…。さて、どうして山に登らないのか?

山岳会OBたちは、山のスゴイ魅力を、高校生や大学生たちに伝えたいと総力をあげて、今回の海外遠征に取組んだ。

ベースキャンプからのブログ配信、メール・衛星電話で即時交信OK!

この事業を知る方々は、学士山岳会記念事業のブログを見ていた方も多しことだろう。第一、第二、第三チームは衛星電話を持ち、毎日のようにその様子は日本へ伝えられ、国内情報担当者がブログへ配信していた。さらに、4800mのベースキャンプ(BC)からも、第一チームが作成する写真入りのレポートがメール送信された。隊員の体調やその日の行動、ベースキャンプにやってきた珍客(ナキウサギ)や意外に豪勢な(?)食事内容など、ユーモアにあふれた日常報告が載っている。ヒマラヤってこんなに身近だったろうか…。ITは世界を狭くし、ヒマラヤ遠征のイメージは確実に変化した。

現地ブログより

…先日までヤクが草を食べていた草原は白銀の世界、花谷(泰)隊員はさっそく西洋スノーシューを履き、猛烈な勢いでトップの大木隊員を抜き去りました。負けじと和かんじきを装着し、追いつける大木隊員…このまま二人でC1までデットヘッドしました。上部は交代でラッセルし、C1まで2時間40分の好タイムで到着です。……そして衝撃のC1、二人で大笑いしてしまいました。被害状況はテント3つのうち、2つは頭が30cm強だけ覗いた状態で半壊埋没、雪の上に張った一張は完全に埋没していました。(10月9日)

*雪埋没は大変な作業だったとのこと。

(ブログURL:<http://sac60th.blog91.fc2.com/>)



第一チーム

ネムジュン北西壁の 初登攀成功!

10月30日、田辺治隊長、角谷道弘隊員、花谷泰広隊員、大木信介隊員が標高差960mの氷雪壁を越え、頂上近くのヒマラヤ巖^{*1}をトラバース^{*2}する緊張のクライミングの末、ついに初登攀に成功した。ヒマラヤ遠征25回目という田辺隊長にして、初めてのアルパインスタイル(荷揚げのための拠点を置かない)だった。

花谷隊員の「頂上に立った嬉しさなど微塵も湧いてこず、むしろここからの下降のことを考えると、これからが本当のクライミングの始まり」というブログ報告からは、登攀がいかに厳しい環境であったのかが伺える。そして「登頂して、翌日懸垂下降で壁を下り切るまで緊張感が途切れることが無く、いいクライミングができたと思います。信州大学山岳会の底力を見せることができたと思います」と、最後にはその充実感が語られていた。



日本ヒマラヤ協会顧問の
山森欣一さんの話

「7000m峰のネムジュン
北西壁でアルパインスタイル

による初登攀成功は、ヒマラヤ経験豊富な歴戦の強者・田辺隊長のルートを選ぶ能力の高さを証明した。角谷隊員、花谷隊員は国内トップの登山家。田辺隊長のリーダーシップのもと総合力で達成した快挙だ。今回の確かな気象予報という科学を利用し、少ないチャンスを生かした。まさに信州大60周年記念事業にふさわしい成果だった。今後、8000m峰でのアルパインスタイル挑戦に期待したい」

登攀:手足を使って急角度の壁をよじ登ること。 *1ヒマラヤ巖(ひだ):山腹に積もった雪にできた規則的な間隔をもった雪の縦ひだ *2トラバース:山の斜面を横切って進むこと

各隊の計画 と実施結果

第一チーム

「ベリヒマール登山隊」

隊長:田辺 治(農'84卒業)

他7名

信州大学登山隊が過去に登頂した山々を含むベリヒマール山域で、日本トップクラスの若手OBがパワーを結集し、7000m級の初登攀などをわらった。

■日程 9月6日～11月13日

○ヒムルンヒマール(7127m)

下部新ルートからの登頂

→10月14日、15日登頂

○ネムジュン(7137m)北西壁の初登攀

→10月30日登頂

○ヒムジュン(7092m)から

ヒムルンヒマールへの初縦走

→落石の危険性が高く中止

第二チーム

「マナンヒマール登山隊」

隊長:小林 元紀(工'69卒業)

他4名

中高年(メンバー中4名が60歳を越える)チームが、その力量に合わせたマナンヒマール山域の6000m級のピークをわらった。

■日程 9月22日～10月29日

○ピサンピーク(6091m)の登頂

→9月28日登頂

○チュルー最東峰(6038m)と

チュルー南東峰(6429m)の登攀

→悪天候のため中止

第三チーム

「アンナプルナ山群一周 トレッキング隊」

隊長:松尾 武久(文理'65卒業・実行委員長)

他18名

信州大学登山隊にとって馴染み深いアンナプルナ三群一周総距離数220キロを総日数16日間で踏破した。最高地点はトロンラ(5415m)。

■日程 9月24日～10月21日

第四チーム

「故小川勝追悼トレッキング隊」

隊長:宮崎 敏孝(農'66卒業・特任教授・会長)

他30名

信州大学登山隊の海外遠征に尽力し、基金を遺した小川勝さんの追悼トレッキング。10月14日に、小川さんにゆかりのある、ババトプールの「関根メモリアルガーデン」にて追悼式を行った。

■日程 10月11日～10月19日

故・小川勝氏(1942-2007)

名古屋生まれ。1962年信州大学英文科入学、山岳会入部。1967年、信州大学山岳会として、初めてヒマラヤ遠征を目指したネパール調査隊を結成、約6ヶ月間の踏査を敢行して海外遠征の基礎を築いた。企画力、実行力に定評があり、卒業後も世界各国を巡り、環境保全型切削油のビジネスなど、バイオニア的な仕事に精力を傾けた。一方、明るく大らかな人柄は人と人を繋ぎ、既存のものにとらわれない新しい方法を模索する市民活動を支援し、信州大学学士山岳会の活動継続のために尽力した。2007年1月26日永眠。

各隊帰国コメント

第二チーム マナンヒール登山隊 隊長 小林元紀

一度は夢にみたヒマラヤへ。長年の念願かない満足!



山岳部で鍛えられ学窓を出でて40数年、その間それぞれの地域、職域で好きな山登りを続けてきた仲間たちが、この度、一度は夢に見たヒマラヤの頂に立つことができました。天候の悪化で当初2座目指していたものが、1座(ピサンピーク、6,091m)になりましたが、長年の念願がかない大変満足しています。

ただ、メンバーの一人、駒井氏はがんの治療中であり、世の同じような人たちの励

みになるべく是非ピークに立ってほしいと皆で話し合っていました。駒井氏はアタック途中、体力の限界で登頂を断念せざるを得なかったことが心残りでありました。理解してくれた家族はもとより、60周年記念事業として企画、立案に関わられた多くの関係者には感謝の気持ちでいっぱいであり、また亡くなられた小川先輩の熱き思いに少しはお応えできたかと思っています。

第三チーム アンナブルナ山群一周トレッキング隊 隊長 松尾武久

間一髪、80cmの積雪を逃れた峠越えに乾杯!

第三チームは総勢19名、71歳を頭に58歳まで、平均年齢は65歳4ヶ月、信大学士山岳会メンバーが13名、その関係者が6名という構成であった。サーダー(シェルパ頭)によると、高年齢者、19名の大集団、長期間のトレッキングということで、果たして最終日まで行けるかどうか大いに悩んだらしい。しかし、その危惧は出発して2~3日で無くなり、統制のとれた、歩きなれた集団であることが分かり安堵したという。

チームの活動はトロンパス以前の第一

段階と以降の第二段階とに大きく分けて行動した。第一段階は全員無事に5400mの峠を越えることを目標にして、各隊員の行動をある程度コントロールし、第二段階に入るとトレッキング本来の楽しさを味わってもらうため、各隊員の自由意志に任せた。

少々の頭痛はあったが、10月4日全員が雪のトロンパスにたどり着き、幻想的な峠を越えられたのは隊員の努力と自制

心の躍物であった。その後天気が崩れ、80cmの積雪が峠に積もったとの情報を聞いたとき、最大の難所を間一髪の差で越えられたことに全員で乾杯した。



第四チーム 故小川勝追悼トレッキング隊 隊員 金子鉄男

未知・未経験の領域への挑戦の機会を若い世代に引き継ぐべし

「信州大学士山岳会小川勝山岳基金」のテーマ

第四チームは全員で30人を超える大部隊。第三チームとボカラで合流し、総勢49名で、



バトブルへ向かう途中のジュゲリにある関根メモリアルガーデンへ赴き、故小川勝氏追悼慰霊祭を行いました。その時の様子をお伝えします。

井間さんの司会進行で、松尾さんの挨拶、宇都宮さんによる読経、全員による献花、宮崎会長および雪家さん(難波さん代読)から

の慰霊の辞の後、岩津様(小川さんの奥様)からみんなに一人ずつ遺骨を手渡され、それぞれが小川さんへの思いを込めてナラヤニ川へ散骨しました。

散骨した川岸で小川さんの18番だった「ひよこりひょうたん島」を合唱、最後に、岩津様からの遺族挨拶、春寂寥で閉会しました。

また、追悼式の途中で第一隊のヒムルン登頂の一報がみんなに伝えられ、拍手が起こりました。





7126mヒムルンヒマール登頂おめでとう!!
現役山岳部員江川 信 (理学部2年)さん ヘインタビュー

山のスケール、人の暮らし、 ぼくには、すべてが衝撃でした。

江川信さんは、現役山岳部員として、たった一人遠征に参加。経験不足を補うために、昨冬、春、夏と合宿を中心に訓練を重ねての参加だった。11月初めに広報室に現れた江川さんは日焼けし、たくましさが増していた。

1987年生まれ。和歌山県出身。高校から登山部。
今回の遠征中、理学部の先生からの指示を受け、植生調査と雪のサンプル採取も行った。

初めての海外で初めての海外遠征。 不安はありませんでしたか?

合宿などで訓練を積んでいきましたが、何がどう怖いかわからないから、コワイという状況でした。現地ではBC(ベースキャンプ)まで1週間ぐらい歩きましたが、言葉は通じないし、子どもから物をねだられるし、不安な感じもありました。でもそれらも含めて全部楽しかったですね。

食事はどうでしたか?

コックが作ってくれるものは、たいいおいしかったですよ。でも、毎回「一体何がはいっているんだろう」と、びっくり、ドッキリの日本料理でしたね。

BC(4800m)では、どんな様子でしたか?

9月20日にBCを作ると、ふもとのプーガオンという村からラマ僧を呼んで安全祈願の祈禱をしてもらいました。15年前に信大チームがギャジガンに登った時に作った祭壇が残っていてそれを使ったんです。そこから第一、第二キャンプ(C1、C2)を作っていく時に、ぼくはC1以降の高所順応がうまく行かずに結構つらかったですね。もうへろへろでC2(6200m)へ辿り着けず、6100mぐらいでギブアップしたり。田辺さん直伝の高所順応のためのトレーニング、100mダッシュもやりました。ジョギングのペースで走っても息あがって大変でしたが、花谷さんや大木さんとぼくが走る競争になってしまって「これは身体に悪い…」(笑)と。

C1、C2がつくれたところで、悪天候のために出発を延期、沈殿(キャンプに留まる)が始まりました。トランプしたり、絵を描いたり、3日間降り続いていた雪かきをしたり。やっと雪が晴れた10月9日、埋もれたC1キャンプを掘り出し、11日に第一隊*がBCを出発、C1へ行きました。

頂上までは順調でしたか?

12日にC1を出しましたが、雪に埋もれたロープの掘り起こしで手間取り、もう一度C1へ戻りました。その日はやっとよく眠れて、13日は前日より順調にC2へ。14日にアタックしました。頂上までは西側を登っていったので、日が当たらず、風も強かった。低体温症になって動けなくなってしまったら終わりだと思って、ヤッケの下にダウンを着込みました。

山頂は感激しましたか?

「ああ、ここが山頂か…」という感じで“感動”を感じている余裕はなかったのですが「おめでとう」って握手して、抱き合ったのはうれしかったです。ただ風はすごくて、旗を出すのに必死、手を離したら飛んでいきそうでした。

危険を感じることはなかったですか?

下りは田辺さんが心配して、バランスを崩したら止められるようにぼくとロープで結びなおし、ぼくが先頭を下りにいきました。集中していたので、こけませんでした。雪が被ってわかりにくいクレバスが多く、一つのクレバスをバツと飛び越えたところに、もう一つのクレ

バスが開いていてヒヤリとしました。C2から下った所で、第二隊が登ってきたんですが、その時、花谷さんに「よくがんばったな」と。嬉しかったですね。C1に戻ったところで、「登ったんだな…」と実感が湧いてきました。

ネパールへ行ったこと、日本へ戻ってきてどんなことを感じていますか?

日本では絶対にありえない環境が向こうでは当たり前で、人間っていろんな生き方ができるもんだなあと思いました。例えば、往きに見たボロボロだった小屋が、帰りには綺麗に直っていた。聞くと冬に木こりの人達が寒いから扉とか薪にして燃やしてしまったが、今はトレッキングのハイシーズンなので、急速修理したというのです。道なんかも災害で簡単に壊されてしまうんだけど、すぐに直してしまう。壊れたら作り直せばいいやという発想がすごい、日本とは違うなと思いました。

山については、ぼくが今回役に立ったのは最後に荷物がかつぎ降ろす時ぐらいで、後は先輩たちがやっていたことにヒイヒイ言っただけでした。次回は、もっと前に出ていきたいと思っています。



左上、ベースキャンプでスペイン人チームと交流。右下3日間ですっぽり雪に包まれたBC。右、プーガオンの村。人も、その食もたくしかった。